

特別講演

日本古典文学の翻訳について

Translation of Japanese classical literature

Donald Keene*

Translation of Japanese classical literature into foreign languages began late in the sixteenth century, when Portuguese missionaries used literary works as their textbooks for learning Japanese. With the expulsion of the Europeans in the seventeenth century, translation from the Japanese became extremely infrequent and erratic until the 1860s. Ever since that time there has been a steadily increasing amount of translation of Japanese literature not only into the various European languages but, especially in the case of modern literature, into Korean and Chinese. Today there are comparatively few major works of classical Japanese literature which have never been translated into any foreign language.

The early translations of Japanese literature were made unsystematically. It is often not clear why particular works were chosen nor who the anticipated readers might have been. The translations made by Arthur Waley inaugurated a new era in the appreciation abroad of the Heian classics and Nō, and the best

* Donald Keene コロンビア大学教授

translators into English have tended to follow in his footsteps in writing for a general, rather than an academic audience. But the issue of literary versus academic translations is by no means settled, and we may in the future be able to enjoy the luxury of several different translations of the same classics.

本日の演題は、一応「日本古典文学の翻訳について」ということになっています。半年程前に依頼された時はそういう題で話そうと思っていたのですが、あとになって少し違うものにしようと思いました。

この理由は、私がある外国人による日本文学の翻訳を知っているわけではないということです。

日本古典文学のドイツ語訳や、ロシア語訳は、読めないので言及することができません。ただこういう訳があるということであれば他の本に書かれている通りなので別に述べる必要もないでしょう。

もう一つの理由は、講演を準備している段階で、この資料館の福田教授の書かれた二つの論文を手にし、私が述べてみたい趣旨が既に書かれていることが分り、多少それと違った事を述べることにしたわけです。

今回は主に、日本古典文学の英訳について述べてみたいと思います。英訳は凡そ百年程前に始まりましたので、最初にそれ以前の歴史的背景について少し触れたいと思います。

外国人として日本古典文学の翻訳に、初め一番有利だったのは中国人でした。中国人は外国人として一番古く日本と接触があり、しかも有名な三世紀の『魏志倭人伝』の頃から、日本民族の事を多少知っておりました。この文献は、日本に関する文献としては一番古いものになっています。ところが中国にはずっと中華思想というものがあって、中国以外の文化的民族を認めていなかった。この姿勢のためでしょうか、日本に文学が存在するかどうかと

というようなことは問題にしなかった。あったとしてもどうせ価値がないという前提があったので、中国人は日本のことを知るようになっても日本文学の翻訳を率先してやろうとは考えていませんでした。

そればかりでなく、その後中国では、何回も政権交代があったにもかかわらず、日本に関する記事は、多少の訂正、追加はありましたが、『魏志倭人伝』の内容と大体同じことが引き続いて記載されていました。このことは、中国人が、単に日本のことを野蛮だと思っていたからというだけでなく、文学に対する考え方が、西洋人や日本人の考え方とはかなり異っていたからであろうと思われます。

中国人の常識から判断すると、文学というものは、儒学、歴史の本、まれに漢詩も文学の範囲に入っていました。日本の和歌のようなものは、その中にはいらず、また物語、戯曲も含まれていませんでした。中国人は古くから日本人と交渉があり、長崎には中国の商館があって、一時はそこに五千人も中国人が滞在し、これらの人々の中には、日本語をかなり自由に話せる人もいたと思われますが、翻訳はほとんどありませんでした。少なくとも私の知る限りでは、日本文学の中国語訳で一番古いのは、徳川末期のものだと思います。それ以前は、簡単な民謡の翻訳とか、長崎の遊郭の歌などの中国訳はありましたが、古典に関心をもつような中国の学者は、日本に文学が存在するかどうか問題にしませんでした。

もう一つ別の大きな問題があります。中国人の常識では、中国の儒学は、人間の一番正しい道であると考えており、教養ある人間であれば当然儒学を学ぶ、また自国の哲学は、あらゆる人間のために良い哲学で、全ての人間は、いずれ中国の哲学を学ぶだろうという前提がありました。

16世紀に、ヨーロッパ人が日本まで航海し、日本でキリスト教を伝道しようとした時、日本に対してそのような考えがなかったので、(あったとすれば悲惨な結果となったでしょうが) 宣教師達は、どうしても日本語で伝道しなければなりません。日本語を覚えることは当時のヨーロッパ人にとつ

ては、非常に難かしい事でした。辞書はもちろん、文法書もありませんでした。そこにいたのは数人の通訳だけでした。その通訳も、船がマカオあたりで難破して、上陸してからポルトガル語を少し覚えたとかいう漁師たちで、もともと教養があった訳ではないので、本当の意味での通訳、キリスト教のありがたさを話す通訳ができる人は一人もいませんでした。しかしポルトガル人はぜひ日本で伝道したいと思っていたし、この国で貿易をやり、何らかの形で冒険をしようと思った人もたくさんいたということが推測できます。

ヨーロッパの日本に関する文献の中で一番古いものは、恐らく十三世紀のマルコ・ポーロが書いた『東方見聞録』でしょう。彼は元の皇帝フビライ汗の宮廷に長く滞在して、ジパンクという国についてはおもしろい噂をいろいろ聞きました。ジパンクというのはジー・パン・クォー（日本国）という中国語をイタリア人がジパンクと聞いたものです。その噂によると、日本の道路は全部金で舗装されていて、ポルトガル人にとって大へん魅力的でしたから、彼等は日本へ行く危険な長い旅に出ました。コロンブスがアメリカを発見したのも同じ理由ではなかったかと推測されています。彼がはじめての長い旅行でバハマ諸島に着いた時、そこが日本ではないかと一度は思いましたがどうも日本とは様子がちがう、彼はジパンクはもっと北の方か南の方か等と思いつつ最後までキューバを日本だと思っていました。

このような歴史的背景もあって、ポルトガル人やスペイン人は、お金を儲け、キリスト教を伝道するために一日も早く日本に行きたいと思っていました。

伝道師の中で一番良く知られているのは、ポルトガル人のザビエルですが、彼が伝道する時、どうしても神の話をする必要がありました。彼はもちろん日本語を知らなかったので通訳に、英語の「ゴッド」を何というか尋ねると「神」だと言うので、彼は神はどういう風にありがたいか、われわれはどういう風に感謝すべきかなどを説くと、日本人は皆同じ様に「なる程」と頷き、抵抗しないので変だと思いました。調べてみると八百万神やおよろずのかみのように解釈され

ていることがわかったので、通訳に別の言葉はないかと尋ると「はい、『大日様』という言葉があります」というので、大日様という名で話をすると、また日本人は頷きます。仕方がないのでザビエルはラテン語で“deus” “デウス” と言うことにしましたが、ポルトガル語の訛で、“デ・ウース” は「大嘘」^{だいうそ}の様に聞えるらしく日本人が吹き出してしまい、うまくゆきませんでした。これは冗談のような実話です。

ポルトガル人の中にロドリゲスという16歳の少年がおりましたが1577年に来日し、若いので日本語をよく覚えしました。来日してから14年目の1591年(天正19年)に日本巡察使ヴィニャーノが豊臣秀吉に謁見した時の通訳をし、秀吉が亡くなった後は徳川家康に仕えました。ロドリゲスは1594年まで日本に滞在し、『日本大文典』という3冊の本を出版し、その後マカオで日本語—ポルトガル語の辞書、『日ポ辞書』を編纂しました。この『日ポ辞書』は室町時代の文学、特に狂言等に非常に役に立つ文献で、その中に和歌や連歌のポルトガル語訳が出ています。これは私の知る限り、和歌や連歌の翻訳として一番古いものです。もう一つ触れたいことは、当時ポルトガル人が日本語を学ぶ教科書がなかったので、『平家物語』を教科書として使用し、それをローマ字で印刷しました。

これも当時の日本語を知ろうとする者にとって何よりも大切な文献です。結局、わずか40年間に、ヨーロッパ人は、日本文化、特に日本の古典文学について中国人の千年にわたる長い交流で得た成果よりはるかに豊富な成果を挙げました。

鎖国時代にはいると、幕府の命令で日本語を外国人に教えることは禁じられました。しかし、日本にいた少数のオランダ人、またオランダ人と偽ったドイツ人やスウェーデン人が出島の商館にいて、彼等は多少日本語を覚えたと思われます。このほかもう一つ、非常におもしろい学校がありました。ロシア政府の命によってシベリアにできた日本語学校です。もともとその学校の教師達は難破してカムチャッカなどに漂流した漁師で、彼等はロシア正教

の洗礼を受け、ロシア人の妻をもらいその学校の教師となりましたが、世界の教育史の中でも最も成績の悪い学校だったらしく、30年間勉強しても、少しも日本語がわからなかったという成績表が残っています。その原因の一つは、教師たちが漁師達で、文字を知っているものが少く、しかも日本各地から集っていたので、教師同志の話しもよく通じなかったということです。このような学校でしたが、もう少し時代が後になり、19世紀になってヨーロッパ人が日本語を覚えたいと思った時にも、この学校が西洋で唯一の日本語学校でした。

日本の古典文学とは言えませんが、日本語の書物の翻訳で一番古い例は、恐らく『三国通覧図説』という林子平の作品ではないでしょうか、翻訳者はドイツ人サフロフですが、当時の東洋研究の中心がパリであったためか1832年（天保3年）フランス語の翻訳で出されました。

その後1847年（弘化4年）、柳亭種彦の『浮世形六枚屏風』のドイツ語訳が、オーストリアのアウグスト・フィッツマイヤによって出されました。彼は万葉集の部分的ドイツ語訳もしました。

以上のような背景をもとに、ここで英語の翻訳者の話をしたいと思います。まず、アーネスト・サトーの話から始めましょう。サトーの場合は、実際よく日本語を学びましたし、ある意味では日本の歴史の中で相当大きな役割も果しました。萩原信和の本に『遠い騎士』というのがありますが、サトーのことを非常に詳しく書いています。

しかし日本古典文学の英訳者として、ぜひとりあげなければならないのは、バジル・ホール・チェンバレンで、彼の名のバジルはギリシャ語の王様のことで、ホールは日本のお寺の「堂」のことです。そこで彼は号を「王堂」と名づけました。彼がどういう動機で日本語を覚えたか、という不思議な話しになります。彼は眼病で目が悪くなり、その療養の為に遠い旅行をした方がよいと考え、中国まで足をのばし、明治6年に日本へやってきました。当時23才でしたが、海軍兵学寮で教師をし、そこで日本語と日本古典文学を一

所懸命に勉強しました。そして1886年（明治19年）東京大学教授となり、後に日本言語学の教授になりました。彼は1911年まで日本に滞在し、その後ジュネーブに移りました。

チェンバレンの翻訳で一番有名なのは今から100年前の『古事記』の翻訳です。『古事記』は訳し易いものではないし、資料も少かったのですが、当時としては素晴らしいもので、彼は天才的であったといってもよいと思います。琉球語の研究もしましたし、枕詞の研究もしましたし、今はやっているアイヌ語と日本語の比較のような研究も100年前にすでにやっています。ところが彼には一つだけ感心できない点がありました。それは文学の美しさがわからなかったということです。『古事記』の翻訳はよいとして俳句の英訳は信じられない位へたでした。それは彼が俳句がわからなかったからではなく美しい英文が書けなかったからです。彼は晩年フランス文学選集を発表しましたがフランス語の詩は書きませんでした。

3番目に挙げなければならないのはアストンです。彼もサトーと同じ外交官で1864年（慶応元年）英国公使館通訳生として来日しました。1871年“Short Grammer of Japanese Vocal Language” という本を出しました。これは口語の文法書としては最初のもので、当時口語の文法書は日本でもまだなかった頃です。1879年には日本語と朝鮮語との比較研究の本も出しました。1889年彼は英国へ帰国しましたが、その間に『日本書紀』の全訳を行ないました。この翻訳は素晴らしいもので、『古事記』の英訳はその後出ましたが、『日本書紀』の英訳はまだ当分出ないと思われます。ケンブリッジ大学の図書館に幸いアストンのノートが残っていますが、それを見ると実に感激いたします。彼は最初いくつもある変体仮名は全部意味によって違った字を使わなければならないと思っていました。こういう重荷を背負いながら日本語の勉強がよくできたなあと思います。

彼のもう一つ大きな功績は1899年に西洋人による最初の日本文学史を書いたことです。現在私は日本文学史を書いています、これまで八十年以上に

わたって英語で書かれた唯一の日本文学史でした。今これを見ると不十分な点や、明らかな間違いもあります。たとえば『平家物語』は『源平盛衰記』の下手な焼き直しであるとか、能は演劇でもなくわけのわからないつまらないものであるとか、西鶴の小説はあまりに尾籠であって題さえも挙げる事ができない等とっています。ビクトリア王朝時代の人としてはやむを得なかったかもしれませんが、少し打ちあけ話をするとアストンの買った蔵書の中には西鶴のものはかなり含まれています。もう一つ、馬琴は長い日本文学史の中で一番すぐれた作家だと明記しています。現在では馬琴が最も偉大な作家という人は限られていると思いますが、当時の常識とはそんなにかけはなれていませんでした。坪内逍遙でもそういったかも知れません。今から見ればたしかに欠点はありますがとにかく彼は偉大な人でした。

今まで述べた人々はみな私よりずっと先輩でお会いしたことはありませんが、これからお話する二人は、私が直接親しくしていただいた方々です。

その一人はサンソン卿ですが、彼も外交官で英国大使館に勤めていましたが、亡くなった後にある人がこういうことを書いています。「西洋が生んだ日本研究家の中で、偉大なアマチュアとして最後の人であり、専門学者として最初の人である」と。つまり彼はちょうど過渡期の人物で、昔風の素人の最後の人であり、また次の時代の専門学者としては最初の人になり、大へんすぐれた人でありました。

大使館の人は忙しいというのが常識ですが、どうして日本語の研究ができたかとサンソンさんに聞いたことがありました。当時英国の船が横浜に入港するのは月に一度位で、三日間位は忙がしいが、あとは仕事もなく自由であったとのことです。つまり地上の極楽とも言える時代でした。サンソンさんは、早くから日本の古典文学に関心を示し、1911年に『徒然草』の英訳を発表しました。この他に、能の翻訳や、1924年には『宣命』の翻訳も出しています。1928年には A Historical Grammer of Japanese「日本文法史研究」という本を出しました。しかしサンソンさんの全出版物の中でも一番広く読まれて

いるものは、1931年の“Japan A Short Cultural History”『日本文化史』でしょう。

私がサンソンさんに初めてお会いしたのは、サンソン先生がコロンビア大学で教えておられる頃で、合計9年間コロンビア大学で、戦前、戦後を含め教えて下さいました。退官なさってから、長い三冊本の、日本の歴史を書かれましたが、最後まで、日本古典文学に非常に関心を示され歴史家であると同時に美しい英語を書ける方でした。

私個人としては歴史家の英語には感心しないのですが、サンソン先生の英語は、すばらしいものでした。

ここで一番有名な人としては、アーサー・ウェーリーさんをあげなければなりません。ウェーリーさんは、1966年、ちょうど16年前に亡くなりました。ウェーリーさんは独学で日本語を学びましたが、覚えるきっかけとなったのは、「大英博物館」に勤めていた頃、徳川末期のまづい浮世絵に、おもしろそうな歌が書かれており、誰かに「何と書いてあるのか」と、尋ねられたからでした。ウェーリーさんは、日本語の勉強を始め、その後「歌」という本を出しました。その「歌」の序文の中で、少しでも語学力のある人なら、日本語の文語体を覚えるのに、だいたい1ヶ月しかかからない、と書いてあります。それが本当だとすれば、私などは、頭の悪い部類に入りますが、私からいえば、ウェーリーさんは天才であったということになります。

日本では、天才という言葉を使用すぎるきらいがあり、外国語を二つ出来るような人を、すぐ天才といますが、ウェーリーさんは、私からみても天才だったと思います。普通の人間の常識では考えられない頭の持ち主でした。ウェーリーさんが「歌」という本を出してから、1920年に能の英訳集、1928年には「枕草子」の部分訳を出し、1925年から33年にかけて、「源氏物語」の全訳を出しました。

日本人の考えでは、当時、既に与謝野晶子の現代語訳があったので、ウェーリーさんが、その翻訳を使ったのだらうと考えるかも知れませんが、ウェー

リーさんは最後まで、その翻訳のあることを知りませんでした。ウェーリーさんは、最後の「宇治十帖」まで、北村季吟の「湖月抄」の注釈だけに頼って、翻訳をやりました。しかも、「大英博物館」にあった本は、刷りが悪かった為に、なかなか判読しにくかったのですが、それでも頑張った姿は、想像を絶するものです。又、ウェーリーさんは一度も、日本を訪れたことはなく、何度、招聘されても、「私は平安時代の日本に興味があり、現代の日本は、どうでもよい。」というような態度を示し、現代の日本文学にも、ほとんど関心がありませんでした。

例えば、戦後の話になりますが、谷崎潤一郎が、アーサー・ウェーリーに『細雪』を贈りました。恐らく、源氏物語を訳してきた人に、是非私の源氏物語も訳して欲しい、というような意味も含まれていたでしょうが、ウェーリーさんに私が「どうでしたか。」と尋ねると、「ちょっと平凡だった。」と簡単に述べただけでした。そしてその本は私が頂くことになりました。

英国人としての翻訳者の名をもう一人、あげてみたいと思います。名前は、それ程知られていませんが、F. V.ディケンズです。『竹取物語』や『方丈記』の英訳もありますが、一番大切な翻訳は1880年（明治13年）に出された『忠臣蔵』の翻訳です。

日露戦争が終わった時に、アメリカで平和交渉が行なわれましたが、当時のアメリカ大統領ルーズベルトは、非常な親日家で、日本の為に色々と尽くしました。何故、親日的であったかという理由の一つに彼は、この『忠臣蔵』を読んで、親日的になったと言われています。

私はウェーリーさんの翻訳をほめたいのですが、ウェーリーさんのおかげで日本が得をしたとは思いません。しかし『忠臣蔵』の翻訳のおかげで、日本が大いに得をした点は、認めざるを得ません。

アメリカの翻訳書はどうであったかという、残念ながら、戦前に良い翻訳者は、ほとんど存在しませんでした。翻訳者としては、例えば、大阪外語大で教えていたグウェン・シューという人がいましたが、彼は、もっぱら近

代・現代文学（芥川龍之介、菊池寛、倉田百三など）の翻訳で知られ、現在はほとんど読まれていないのではないかと思います。

俳句の翻訳に関しては、かなり古くからアメリカ人のものはありましたが、現在では、ほとんど問題にされていません。現在、まだ読まれ続けている米国人の日本古典文学の英訳は、詩人エズラ・パウンドの能・謡曲の翻訳です。翻訳そのものは間違いだらけで、不正確を極めますが、翻訳としてではなく、英語として読む時は夢中にさせられます。個人的な話しになりますが、私自身、エズラ・パウンドに会ったことはないのですが、日本文学選集の編集をやっていた時に、エズラ・パウンドの「杜若」に原文にあるものが省略されないものを多くとり入れたりしてあるので、翻訳というべきかどうか考えさせられつつも、ともかく美しい英語なので、取り入れたいと思いました。

彼は、フェノロサの翻訳を使って、美しい英語に直しましたが、フェノロサの字で「あやめ (Ayame)」が「あざめ (Azame)」のように見えたのでパウンドの訳に「あざめ」がでできます。そこで、私は精神病院に入っているパウンドに手紙を書いて、「そういう箇所を訂正してもよいか」と尋ねると、間接的に「構わない。」という返事がきました。そこで、勇気をだして、「貴方の翻訳では、『東から』となっているが、実際は『東へ』です。その部分を訂正しても、構わないでしょうか。」と手紙を出すと、お前はひどい共産主義者だという返事がきたので、翻訳の改訂はあきらめました。

次に、日本人による英訳について触れてみたいと思います。一番古くて、まだ多少読まれているものは、末松謙澄による『源氏物語』の部分訳です。この翻訳は、源氏物語54帖の中、最初の14帖だけですが、発表されたのは明治14年、場所はロンドンです。

翻訳としては割合正確です。先程のパウンドの例の逆で、非常に退屈な英語です。その英訳を読んだあるフランス人は、「紫式部はシキデリー（17世紀に非常に長くて退屈な小説を書いた人）だ。」と評しましたが、長い間『源氏物語』の英訳としては、それしかありませんでした。

もう1つ異色の英訳として、夏目漱石の『方丈記』があります。明治24年(1891年)漱石が24才の時の翻訳を、冒頭の部分だけ読んで見ますが、私の翻訳を、後に付け加えます。

「ゆく川の水の流れは絶えずして、しかも先の水にあらず……」

‘Incessant is the change of water where the stream glides on calmly: the spray appears over a cataract, yet vanishes without a moment’s delay’
(漱石訳)

‘The flow of the river is ceaselessly and its water is never the same’
(キーン訳)

だいたい漱石の翻訳は、私の翻訳の2倍位の言葉を使い、原文にないような表現をしています。それは、英語に精通した日本人の一つの「くせ」だと考えられます。つまり、自分がどんなに英語をマスターしたか、どんなに自由自在に英語を駆使できるかを証明する為に不必要な言葉を入れようとする。私が、日本語で書く場合も、全く同様のことが言えましょう。

同様の現象が、宮森麻太郎の近松の英訳にも表われています。

日本人による良い翻訳の例をあげましょう。例えば坂西志保の狂言の英訳は、信用出来るし、英語も割合おもしろいものです。もう一つ、日本人の英訳としてよく出来たものは、万葉集の英訳です。これは全訳ではなく、全体の4分の1程しかありませんが、英国人との共訳です。

日本人の名は、石井白村、小畑薫良、英国人は、レイ・ハドソンという有名な詩人で、割とよくできた翻訳だと思います。

共訳は、一番よい翻訳の形と言われていますが、成功した例は、この例だけだと思います。この他の共訳は、全て失敗です。

というのは、だいたい、英国人、アメリカ人は、逐語的な翻訳をみて、「あ、わかった、わかった。」と納得し、原文と全く違うものを書いてしまう。日本人は、遠慮深い国民なので、別に異議を唱えずに「なる程」と言って、おかしい英訳が共訳の形で出てしまうからです。

戦前の英訳は、ウェーリーさんのおかげで『源氏物語』はありましたが、西鶴の翻訳は、一つもありませんでした。近松の英訳はありましたが、読めないような代物でした。芭蕉の翻訳はあってもそれは俳句の一部だけで、紀行文、俳文、手紙類の翻訳は、ほとんどなく、万葉集以外の勅選集、『古今集』、『新古今集』などは、全くありませんでした。又、近代・現代文学の翻訳も、ほとんどなかったのです。

不思議な現象ですが、夏目漱石の小説の英訳は『坊ちゃん』『硝子戸の中』『こころ』だけです。このような作品選択の意図はわかりません。鷗外の翻訳は、二、三の短篇だけで、島崎藤村の英訳は一つもありません。谷崎潤一郎は『芦刈』と、『春琴抄』の、きわめてへたな英訳がありました。

ところが、終戦直後、当時ある大学の教授で、後に駐日大使になられた方に、どういふ古典文学の作品の翻訳をやったらよいかと私が尋ねたところ、もう全部訳されていると、あっさりと言われ、非常に、がっかりしたことを覚えていますが、これは事実とかけはなれた答えでした。

それ以来、戦時中に日本語を覚えた人が次々と仕事をして、色々な翻訳を出しました。しかも、もう一つおもしろい現象として、新しい翻訳、新訳という現象も表われてきました。

例えば『古事記』は、1968年に、新しい全訳が出ました。『平家物語』の古い訳が1919年に、そして新しい訳が1975年にできました。こうなると新新訳が一日も早く出ることを祈りたい気持ちになります。

『源氏物語』の英訳は、ウェーリーさんのものが1933年に完成されましたが、サイデンステッカーさんの新英訳が6年前に出されました。『伊勢物語』に3種類の英訳があり、『大鏡』に、二つの英訳があります。古いのは1967年、山際教授のもの。1980年には、マカラ夫人の新しい英訳がでて、その序文の中で、山際さんの翻訳は、先駆者的なものではあるが、もう役には立たない、と述べられています。その意見は、ある意味で真実です。私は彼のものは、全然読めませんでした。

私自身、現在、『徒然草』の新しい英訳をやっており、サンソンさんのすばらしい翻訳はありましたが、私とサンソンさんは異なる人間ですし翻訳がでたから60年も経過しているので、もう一度、やり直す時期と考えてもよいのではと思ひながらやっています。

『忠臣蔵』の新しい英訳も手がけましたが、しかし、前の翻訳と違って、別に国際的な事件に発展することもなさそうです。

最後に、日本文学の英訳の限界について述べてみたいと思います。今までこの問題には触れてきませんでした。一例として俳句をとりあげてみましょう。

近代の俳人、原石鼎の俳句をとりあげてみます。

頂上やことに野菊の吹かれおり

この句に関し、山本健吉は、次のように述べています。

「頂上や」と無造作におかれた初語は、その大胆さが、俳諧師を驚かせるに足れり。

最初の頂上や、という言葉は、余りにも無造作で、俳句を専門的にやっている者は、驚いたに違いない。

ところが、英訳では、どんなに苦勞してみても、人をびっくりさせることは不可能だと思われまゝ。次は中村草田男が同じ俳句について書いたものです。

「や」の切れ字を添えて、いい切った所、山路を極め尽くした時のホッとした安堵感が、さながらにして伝わってくる。

日本人は、この「や」から何かを感じとることが出来ますが、英語には残念ながら切れ字がありません。

それをどういう風に伝えられるか、又、中村草田男が「素人」くさい、ことに「散文的な織り」が特別に優れている。といっています。「素人くさい」とか「散文的な織り」はすばらしい等と言っていますが、英訳にして同じことが伝えられるかどうかということは疑問です。つまり、英語の俳諧師はま

ずいないし、例えいたとしても、散文くさい所を喜ぶはずはないと思います。

他にも類似の問題は幾つかあります。日本人、又は、日本の専門家にとつての意味と、外国人にとっての意味は、必ずしも一致しません。

日本人は、よく森鷗外の英訳が、もっと出ればよい。彼は、日本の近代文学の大家であるので、森鷗外全集の英訳がでてもよい位だと言いますが、たとえ英訳があっても、誰も読まないのではないのでしょうか。日本人にとっての森鷗外と、外国人にとっての森鷗外とは、確かに違いがあります。

日本文学の英訳は、非常にやりにくい作業で、時間もかかり、英文学の日本語訳とは異なります。すばらしい翻訳が完成したとしても、なかなか売れないので、出版社側では、それを推薦してくれません。しかし幸い、日本文学を愛するような外国人が次第に増えているので、そのうち、日本文学の本当の偉大さが、一般に認められるのではないかと望んでいます。いずれにしろ、35年前に、私が初めて日本古典文学の英訳を出すようになった頃と現在とを比べると、大分理想的な現実に近づいてきているように思っています。